ゲイであることを告げると、「あなたハイリスクだわ」とあきれ果てながら言われ、「ハッテン場にも行くの？」と質問された。わずかに知っているゲイ関係の知識をもとに、ゲイのことを相当に危険と思っている態度だった。

3度目の検査の時、「そんな遊びしちゃダメじゃない」と言われた。自分の健康の確認に来ているのに、私生活について言われたくないと思った。それ以降、検査に行っていない。

かなり説教じみた感じで10分程度話した後に検査を受けさせてもらえたが、「もうこんな検査受けないように努力しなさい」とまで言われた。言いたいことはわかったが、一方的すぎる気がしました。

20回目の検査の時に回数の多さに驚かれてしまったようで、さらに「ハッテン場（「そういう」ところという表現をされた）ばっかり行っていたら・・・」みたいなことを言われた。
そんなの百も承知なんだけれど。それ以降、検査に行っていない。

「検査は税金なので、頻繁に何度も検査に来ないように」と言われた。

他の人の検査結果が丸見えだった。友達と一緒に行ったので連番で、友達の結果も見えてしまった。

廊下で座って順番を待っていたとき、検査室での会話が筒抜けで驚いた。告知を受けている人の名前が聞こえてしまった。

HIVに感染しているという告知を受け、他の感染症もすごく忌まわしい表情で指摘され、本当に厄介者って感じの対応だった。さらにゲイであることを告げると、「納得した」 ような表情で接しられ、不快感を覚えた。

結果を聞きに行ったらみんなと別室に案内され、しかも案内の人が急に電話をかけまくった。
その上、HIV陽性の告知を受け、担当の医師から「あんた死ぬよ」と脅された。

最近、迅速検査が導入され始めました。僕はその検査で陽性かどうか判定保留と診断され、ろくな精神的サポートもされず検査機関を出ました。何を訴えたらいいかわからなかったからです。1週間後に正確な診断が出るとのことでした。その日の夜は不安で仕方なく迅速検査についてインターネットで調べても、十分な情報は得られませんでした。「迅速検査での判定保留は本当に陽性の可能性が非常に高い」という誤った情報をインターネットで知って、僕の精神状態は自殺寸前でした。1週間後、陰性であることがわかったけれど、精神的なサポート体制が何もない迅速検査は即刻やめるべきだと思います。

◎自由記述欄に寄せられた声をまとめるにあたって（2003年調査の結果から）

ゲイ・バイセクシュアル男性を対象に2003年に実施したインターネット調査の有効回答数は2,062人でした（研究実施期間：2003年2月28日～5月16日）。質問票の最後に設けられた自由記述欄には、全研究参加者の約32.1%に当たる661名が記述を行っていました。長文のメッセージも多く、原稿用紙数枚分に及ぶものもありました。この自由記述欄は、選択式の質問票に回答するだけでは表現しきれなかった思いを表出し、研究実施者に伝えたいという、研究参加者のニーズを受け止める役割を担ったことにもなると考えられます。またその記述内容は、本調査に参加した感想や研究参加者が日頃考えていることなど、非常に多岐に渡っています。これらの記述の多くは、医学系の学術機関に所属する研究者や心理カウンセラーがこれらの記述を読むという前提があったことによって、研究参加者が自分の心情を吐露する上での安心感が生まれたことや、異性愛社会に対する自分たちの思いの代弁者としての期待が託されたことを推測させるものでした。私たちも彼らの強い思いに心を動かされ、是非とも多くの方に当事者の声を伝えたいと考え、ここに報告する記述内容の分析とまとめの作業を行いました。

自由記述欄に書かれた全ての内容を、9つのカテゴリーに分類しました。9つのカテゴリーとは、「本調査の技術面に関する指摘や批判」「本調査の内容・テーマ・意図への疑問や批判」「本調査への期待・要望・感謝」「本調査による心理面・予防行動への介入的効果」「研究展開への期待」「日頃感じていること」「情報提供の希望」「その他」「分類不可能」です。本報告書では「日頃感じていること」のみ掲載しました。分類方法の詳細やその他の記述カテゴリー内容についてはホームページをご覧下さい（http://www.joinac.com/spirits-wave2）。

2003年に実施したインターネット調査は、平成14年度厚生労働省エイズ対策研究事業「HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究」（主任研究者・木原正博）および平成15年度厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究」（主任研究者・市川誠一）の研究として実施されました。また、本研究はIRB(Independent Review Board)として京都大学医学部「医の倫理委員会」による研究計画の審査および同委員会の指針に基づき、実施しました。

○ 研究組織

日高　庸晴　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野
市川　誠一　名古屋市立大学看護学部
古谷野淳子　松浜病院
浦尾　充子　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻遺伝カウンセラーコーディネータユニット
千葉大学附属病院カウンセリング室
安尾　利彦　国立大阪医療センター／財団法人エイズ予防財団
木村　博和　横浜市南福祉保健センター
木原　正博　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

◎ゲイ・バイセクシュアル男性であること

○周りにカムアウトはしていないけれど、自分がゲイであることを恥じていないし、自分には肯定的です。

○同じゲイの友達もいるし、彼氏もいて、毎日に十分満足している。

○一般の人たちよりも物事を広い視点で捉えることができるようになったし、差別される立場の人の気持ちも理解しやすいと思うので、ゲイに生まれてよかった。

○自分はゲイだのなんだの、と気にして生きてはいない。

○社会のしがらみから離れて、自由に生きられるライフスタイルや環境を作ってからは、ストレスから自分を守ることができるようになった。

○本当は女性を愛したいし、ゲイであることに後ろめたさを感じる。

○世の中ではゲイであることを肯定しようとする運動が盛んだが、自分は違う。男性に性欲を感じるが愛したいのは女性。つまりゲイではなくなりたい。ゲイとして生きることを否定する生き方もあっていいはずだ。

○ゲイとして生きることを認める動きが盛んだけれど、自分にとってはそれが逆に負担。なぜ声高に自分のセクシュアリティをカムアウトしなければならないのか、理解できない。

○少子化が進んでいる世の中で、子孫を残さないゲイへの視線が冷たくなっているように感じられて、辛い。

○以前自分がゲイかバイかもしれないと認識したときはショックで悩み抜いた。社会人になってゲイコミュニティに触れ、決して極端なマイノリティでないと知り、これもありなのかな、と思うようになった。

○取り立てて幸せでもないけれど、ゲイだからといって不幸せな人生だとも思っていない。

○自分がゲイであることを受け入れられたし、周りも受け入れてくれたので今は特に悩んでいないけれど、将来のことを思うと不安になる。

○ゲイであることの苦しさは自分で分かっているのに、生まれ変わってもまたゲイになりたいという気持ちもある。

○一番心配なのは同性愛的なものが遺伝するかどうかだ。遺伝しないのであれば、努力して家庭を築いていこうと思うものも多いように思う。

○ゲイがたくさんいる海外に生活しているので、今はとても自由で幸せだが、日本に帰った時のことを思うと気が重い。

○自分は後天的な要素でゲイになったと思う。しかし誘われて引き込まれてしまうと簡単には戻れなかった。

○私自身自分から好んで同性を愛したい、欲したいという人間になったわけでなく、先天的なものだと思っている。

○どうしてゲイになるのか・・・このメカニズムは多様だろうが科学的に何かが分かれば嬉しい。

○もし自分の性的指向がわかる身体的実験があったら参加してみたい。

考察

自分の中の同性愛性を自覚する研究参加者の中でも、その性的指向をどのように受け止めているかについては様々な記述がありました。肯定的に受け止めている人もあれば、罪悪感や違和感を持つ人もいます。苦悩していた過去を経てようやく今は肯定的に考えられるようになったという人がいる一方で、現在の肯定感は良い環境や人間関係に支えられており、それが変わればたちまち損なわれてしまうかもしれない流動的で不確かなもののように感じている人もいます。さらに、自分が愛情や性の対象を同性に求めることの原因を、先天的あるいは後天的なものと思う人、そのどちらとも判らず、答えを求めている人もいます。遺伝するものかどうかを知りたいという記述には、性的指向に関して自分が味わった苦しみを子どもには負わせたくないという気持ちが表れていました。

異性愛が普通で正常とされ、それ以外は異端視されたり病的なもののように扱われかねない社会の中にいることで、ゲイ・バイセクシュアル男性は程度の差はあれ、自分の性的指向について自分の中での収まりどころを見つけるのに時間とエネルギーを要しているものと考えられます。異性愛者の多くが、成長過程で自分の性的指向をことさら「受け入れる」というプロセスを要しない、あるいは理由を問う必要のない自明のこととして、努力や葛藤なしに受け入れられるのとは大きな違いがあります。

同性愛や両性愛を否定するようなメッセージを不快に思うのはもちろんですが、一面的に「悩むことではない、肯定すべきだ」とするメッセージにも、自分の気持ちとのずれを感じる人もいます。教育現場や保健・医療・福祉領域での相談場面でも、性的指向に関連する悩みがテーマとなった時には「個々の感じ方の差異があること」や「受け入れるプロセスも人それぞれのペースがあること」を前提に、相手を個別の存在として理解しようとする姿勢がまず必要でしょう。

◎差別や偏見のある社会に対して願うこと

○ ゲイに対する偏見のない、自分たちにとって住みやすい社会になって欲しい。

○ 「ホモ」とか「オカマ」という呼び方には、偏見がこもっている。

○ 自分たちはただ同性が好きなだけで、何も悪いことはしていないのに、バッシングや中傷をされるのはおかしいと思う。

○ 同性愛が、異性愛者には理解できない愛の形だと思われるのは分かるが、同性愛が「おかしい・異常だ・人間のくずだ」と差別される社会にはなって欲しくない。

○ ゲイは性的な指向が異なるだけであとは普通の男性です。抵抗無く接してくれることを望みます。

○ 同性愛者も異性愛者も、1人の人間としての価値は同じはずだ。

○ ゲイを「汚いもの」とか「異常なもの」というふうに捉える異性愛の社会に不満を感じる。

○ 世の中には多様な性のあり方があることを、もっと理解してもらいたい。また、同じゲイでも色んな趣味趣向の人がいることを分かってほしい。

○ 世の中の人全てに、「同性愛を認めてくれ」と理解を強要する気はないけれど、せめて同性愛者であることを苦に自殺するようなことが起こらない社会になることを願っている。

○ 理解してもらいたいとまでは思わないが、せめて無視でもいいから、黙ってみていてほしい。

○ 自分たちのことを理解してくれる人が世の中に増えてほしいと願っている。

○ 恋人と街を歩くときに、周りの目を気にせずに手をつなげるような社会になってほしい。

○ 周囲の女性は「ホモってかっこいい」などと言うが、私が「同性愛者だ」とカミングアウトすることによって、関係が崩れるのではないか、見る目が変わるのではないかとものすごく不安になる。

○ 社会的に普通に「存在している」事がわからない人が、いまだ多いと感じる。

○ ゲイや同性愛について、もっと日常で正しい知識を一般の人に知ってもらえる場ができれば、今より少しは暮らしやすくなるのではないか。

考察

ゲイ・バイセクシュアル男性について、社会的な理解を求める記述は数多く見られました。揶揄や蔑視、時には異常者扱いするような言葉を見聞きすることは傷つきの体験になり、逆に過度に理想化されたイメージで語られることにも、自分とのズレを感じて不安になることがあるようです。もっと理解してほしい、という声の一方で、理解までは望まないからせめて自分たちの存在を否定せずに黙ってみていてほしい、という声もあります。差別や偏見によってこれ以上否定されて傷つきたくない、当たり前の生活をしている普通の人間として、身近に存在していることをそのまま認めてもらえるような社会であってほしい、という切実な願いが伝わって来ます。

◎ゲイコミュニティ

○ 同じゲイの人と出会えたことで、1人だけじゃないんだと思えて、自分を認められるようになった。

○ スポーツや文科系のサークルがたくさんあるので、コミュニティの中で充実した生活を送ることができる。

○ 東京に出てきたら、ゲイコミュニティに出会ったし、思いのほかゲイの人はたくさんいるんだなと思った。

○ セックスの相手だけを求めている人が多いような気がして、うんざりすることがある。

○ 昔はよくバーにも顔を出していたが、人間関係の複雑さや他人の噂話に嫌気がさして、行かなくなった。

○ ゲイの中には、生育歴が複雑で、今も精神的に不安定な人が多いように思う。

○ 社会性に欠けるなど、ゲイの世界には様々な問題を抱えている人がいると感じます。

○ ゲイのコミュニティだけでなく、バイセクシュアルのコミュニティも確立してほしい。

○ ゲイコミュニティではバイセクシュアルは嫌われる存在なので、たまにゲイコミュニティの中でも自分の居場所がないなと感じることがある。

○ コミュニティで出会う人の中には、お金やセックスにルーズな人が少なくないように思う。

○ ゲイコミュニティには、閉鎖的で排他的なところがあると思う。

○ カウンセリングよりも、ゲイ同士が出会える出会いの場がほしい。発展場やバーでなく、普通に出会える場がほしい。

○ ゲイの世界にはセックスをする人数はヘテロより多いのが普通という考えがあり、それを新しく入ってくる若い子に押しつける。だから心理的にできていない子は、性に対する考えが甘くなって行くと思う。

○ この世界はまずセックスから入るのでなかなか難しい。

○ ゲイはもっと世間で受け入れられるべきだとは思うが、ゲイ同士での差別などもあり、みんな仲良しこんにちは、とはなかなかいかない。

○ ゲイの世界の人間関係に疲れることも多い。もっと信頼しあえて精神的な充足感が得られるような人間関係を築きたいといつも思う。

○ ゲイを認めない今の社会を嫌だと感じるならば、自分たちゲイもそれを変えられるように行動を起こしていくべきだと思う。

○ 今の日本はまだ同性愛に対する差別が強いというが、実際は同性愛者の方が世間を拒んでわかってもらおうとしていないだけのように感じることもある。

○ ゲイが社会的に認められていないことには、自分たちの責任もあると思う。セックスが前提の出会いなど、誤解を招くようなことは自分たちで払拭していくべき。

○ インターネットを通じて、若いゲイがかなり自由気ままに何の警戒心もなく交際しているようなので、別の意味でゲイが非難されるのではないか。もっと節度を持って行動してほしい。

考察

ゲイコミュニティに参加して、同じ性的指向の人に出会ったり、性的指向を隠さずにいられる仲間とサークルを作ったりすることで、孤立感から解放され自分の存在を肯定できるようになった、という記述がありました。ゲイコミュニティがあること、また実際にそこに参加することで、救われ、支えられているゲイ・バイセクシュアル男性は少なくないと思われます。

その反面、ゲイコミュニティの中で体験することへの違和感や懸念の記述も見られました。例えばコミュニティ内部にもある差別や排他性、性行動を煽るような集団規範、セックス優位で長続きしない人間関係の繰り返し、無責任な人間関係の在り方などです。そうしたことによって精神的な充足感や安心が得られない疲労感を持つ人もいます。ゲイコミュニティの外でも中でも、安心できる人間関係が得られない、居場所がないと感じることは、とても寂しく不安なことではないかと思います。「ゲイ同士が普通に出会える場がほしい」という意見には、もっと違う出会い方、関係の作り方を求める気持ちが窺えます。

一方、社会的な理解や存在認知を求めるならば、自分たちから外に働きかけ歩み寄る、あるいは内部にある問題点を自分たちでよりよく変えていこうとする姿勢も必要なのではないか、との意見もありました。ゲイ・バイセクシュアル男性へのHIV予防介入や支援を考える上で、このような自己変革への意欲や動機づけも、コミュニティに内在する力として十分に尊重すべきものと思われました。

◎ゲイ・バイセクシュアル男性として生きること

○同性愛者であることを隠さなければならない状況の中で、自分なんていなくてもいいと思うことはよくある。

○こんな自分はこれからどうやって生きていくのか不安だ。

○自分の存在意義が見出せない状況が無気力な生活を生み出すことに関連性を考えられるのではないか。

○今の日本は海外に比べて同性愛についてあまりにも無関心というか否定的な考えが多くて、自分がまるで犯罪者のような気さえ持ってしまう日々です。

○もっと同性愛への理解者が増えて、仕事場でも胸を張って自分の意志表現・存在証明ができるようになるといいなぁと思う。

○好きな人に好きだと胸を張って言い、その人とデートをし、皆に祝福されたい。本当にそれだけでいい。でも、それがなかったら人は何のために生きているのか。

○同性愛者として異性愛社会に生きなければならないことは、毎日自分自身がダメな、欠落した人間なのだ、と思わされて暮らすことに他ならない。そのストレスの苦しさは想像を遙かに超えたものです。

○日本はゲイの人が仮面をかぶって生活しなければならない。自己否定を続けていると、生きることができなくなりそうです。

○同性愛者としての自分と異性愛者としてふるまう自分とにものすごく隔たりを感じるとともに、そのことがストレスになっている。

○自分がゲイであることを隠すのは正直言って辛い。嘘をついて生きていくことになるから。

考察

ゲイ・バイセクシュアル男性が社会的に否定されていると感じることで、自分の存在意義に対して懐疑的になり、生きる意欲や希望すら持ちにくくなっている研究参加者もいました。性的指向は「自分とは何か」というアイデンティティを構成する重要な要素です。それをひた隠しにして社会生活を送っていることで、自分を偽っている、あるいは二重の自己を生きているような感覚がもたらされ、辛さや罪悪感、ストレスとして感じられていることが窺えます。ここには、自分が直接的に差別や偏見の対象となるような出来事に出会わなくても、自己否定感を抱え続けたり、ありのままに生きられない日常が続くことが、「生きることができなくなりそう」なほどの重大なストレスになり得ることが示唆されています。

◎若い世代への懸念

○ゲイの世界は20代～30代前半の若者が主流と思うが性感染症についての啓蒙が追い付いていない。病気やメンタルのことも経験のある中年層の存在が必要と思うが、若者だけの世界が固まることで年齢層の壁ができてしまうため、難しいだろう。

○一人で悩んでいる若い同性愛者も多いはず。昔の自分がそうだったから。

○特に若い人にとって住みよい社会にしていきたい。私が感じ取ってきた思いと同じ精神的な苦痛からの解放を保証してあげたい。

○出会い系サイトで中高生の投稿を見かけると複雑な心境だ。自分が悩んでいた分、彼らが羨ましい一方で、決してキレイではないこの世界に早くから染まってしまうのは彼らのためになるのか・・・。

○孤独感を募らせている若年の同性愛者が将来への不安感や孤独感から自暴自棄な行動に走る場合も少なくない。例えば、体を売る、ホモビデオに出演するというのは個人の自由だが、それを若い時に自暴自棄でしてしまうことはおそらくリスクが高すぎるし、これからの若い同性愛者たちのためにも何らかの政治的な手段を講じて防ぐ努力をすべきである。

考察

より上の年代の研究参加者から、若い世代の心身の健康を真剣に心配し、何か力になりたいという気持ちが示されています。自らが経てきた苦悩を若い世代には味合わせたくないと願い、あるいは自分たちの頃にはなかったリスクに現在の若い世代がさらされていることを懸念しつつも、具体的にはどうしたらいいかわからないと思っているようです。また無防備なままコミュニティに飛び込むことで、その影や闇の部分を知ってしまい、若い世代の心がすさんでしまわないかという心配もあるようです。

これまでHIVや他の性感染症の予防介入では、数々のコミュニティベースの試みが実践されています。性的指向を同じくする者同士で、ニーズに則した具体的な情報提供や助言を提供できる点や、行動面でのモデルを示せる点がメリットと考えられるからでしょう。しかし具体的な知識や情報ばかりでなく、上記に見られるような、コミュニティに潜在している連帯感や愛他的な精神そのものが何らかの形で表現され、伝わる機会や場を作り出すことが、予防介入をより有効にする基盤作りとして重要と考えられます。上の世代から性的な対象として関心を持たれるばかりでなく、人間として心配されたり大事にされたりしていると感じることができれば、若い世代が自尊心やコミュニティへの信頼感を育んでいく一助となるのではないでしょうか。

◎インターネット

○インターネットが発達したことで、より一層ゲイコミュニティの大きさを感じられるようになったし、色んな人と知り合えるようになったのは楽しいし、役に立っていると思う。

○インターネットによって同じゲイの人と話したり、会ってつきあったりできるようになり、日常的にも精神的にも楽になった。

○田舎に住んでいると、なおさら恋愛の相手やゲイの友達との出会いの機会が少なくなってしまうので、インターネットの存在はとても大きい。

○共通の価値観の友人やゲイの友人が見つかりにくい環境に住んでいるので、ネットを通じて「隠れゲイ」の人たちがもっと積極的に行動できるチャンスが増えたらいい。

○HIVの問題は深刻だと思う。インターネットが普及し、不特定の相手に出会いやすくなったのが大きく影響している。

○インターネットは個人が自分に必要な情報を自分の判断で取り出して活用できる反面、判断力の十分でない個人にも同時に配信されているのは恐ろしい。

○ネットだけに出会いを求める人は、直接人と会って知り合うことを考えずに、セックスだけの相手を求めている人が多いようだ。

考察

インターネットは、ゲイ・バイセクシュアル男性が仲間と出会い、活動や交流の場を獲得して社会的孤立から解放されることを可能にしました。しかしその一方で、インターネットの普及が、性的な出会いを容易にし、性衝動を駆り立て、性的な刺激や快感への没入傾向を強めている可能性も自由記述の中で指摘されています。これはゲイ・バイセクシュアル男性に限らず、社会全般に認められる傾向ではありますが、日常生活において出会いの手段や機会が限られているゲイ・バイセクシュアル男性にとっては、出会いのきっかけをインターネットに頼る人の割合はより大きいかもしれません。彼らはインターネットの恩恵を受けると同時に、多種多様なリスクにもさらされていると言えるでしょう。

インターネットは、その利便性（距離を問わずに人とのつながりが生まれること、匿名性が保たれやすいこと、情報が得やすいことなど）をうまく活用することで、コミュニティへの帰属意識の低い人やコミュニティを避けている人、あるいはコミュニティベースのメッセージが届きにくい地方在住の人などに対する予防介入の重要なツールになる可能性を秘めています。また、今回の調査から、必ずしも同じ性的指向ではないかもしれない研究実施者と研究参加者との間にも、インターネットを通じてコミュニケーションできる関係や協力体制を生み出すことができるのではないか、と思われました。

◎教育に願うこと

○小、中、高校の性教育で同性愛についてきちんと扱うべきだと思う。それが孤独感を感じている若いゲイの救いになるかもしれない。

○男の子と女の子が恋愛をするのが当たり前、という教育のあり方では、いつまでたっても一般の人からはゲイは宇宙人のような存在のままだと思う。

○学校に通う時期と思春期とは重なる部分が多い。自分が性的指向を自覚した時に周囲はヘテロの人間で溢れており、その環境で生み出された疎外感に今でも苛まれている。

○人生初期の学校教育から性の多様性を教えることで、マイノリティにとっては社会の抑圧を軽減することになり、より良い人生を進む糸口として機能するだろう。

○同性に惹かれる存在もあること、そういう指向の人でも人間的価値は同じであることを初中等教育を通じて広めてほしい。

○教育の場で、同性愛者と異性愛者の学生が自由に交流できるようになってほしいと思う。

○同性愛に悩みかつて学校で匿名の相談をしたが苦い体験となった。現在の学校の性教育で同性愛についてカリキュラムに入っていることを願う。

考察

ここには、同性愛や両性愛に対する社会的な理解の促進を学校教育の早い段階から組み入れてほしいという願いと、それだけでなく同性に向かう欲求や関心を自覚し始めた児童や生徒自身のためにも、学校で性の多様性を認める教育があることの大切さが述べられています。学校という社会の中で、自分が持っているかもしれない性的指向を否定や揶揄、嫌悪を受けるものとして認識し始めるのと、多様な在り方のうちのひとつであり人間としての価値差を意味しないこととして認識し始めるのとでは、その後の人生の方向性が大きく異なって来るものと考えられます。同性愛や両性愛への否定的なメッセージを強く受けるほど、疎外感や不安を感じ、しかもそう感じていることすらも隠さなければいけない（つまり感じていない振りをする）という二重のストレスに同時にさらされることになるでしょう。

性にまつわる教育カリキュラムの見直しや改善も求められますが、それ以前に、教育現場にいる大人が、性的指向について周囲との違いに疎外感を持ったり、自分自身でも違和感を持つなどして密かに悩む生徒や児童が今現在身近にもいるのかもしれない、という想像力を持つ必要があるでしょう。そして自分たちの日頃の何気ない言動の中に、異性愛以外の性的指向を否定するようなメッセージが含まれていないか、またそのことがどれほどの影響を与えうるのかについて振り返ってみることが望まれます。養護教諭や性教育担当者はもちろん、性教育に直接携わることのない教師であっても、性的指向に関する悩みや葛藤を相談できる窓口となる人が身近にいることも、とても重要なことと思われます。

◎将来への不安と法的整備への願い

○ 自分の生きやすい環境を努力して作ってきたが、老後についてはかなり不安。特に病院に入院した時のことを考えると寒気がする。

○ 将来老いていって一人で暮らすのは寂しいことだと思う。

○ 同性を愛することに長い間苦しんで来て、ようやくある男性と出会ったが、自分がこれからどうなるのか？どうすればよいのか？いまだ将来が不安。

○ 将来を真剣に考えるのはストレスです。一人で野垂れ死ぬ自分の姿が目に浮かびますから。

○ 同性同士でも結婚できるようにして欲しいし、それが変に思われずに周囲から認められるような社会になってほしい。

○ お付き合いしても同性だと「どうせずっと一緒にいれるわけじゃない」と遊ぶ人が多い。だから同性婚を認める国を羨ましく思う。

○ 良いパートナーがいるが、老後、自分が死ぬ時の財産分与や面会権を考えると、同性婚・DP法*だけは確立してほしい。

○ 社会制度（保険や年金、婚姻など）上でゲイであることにより不利益を被らないで普通に生活したいというゲイの潜在人口は多いと思う。

○ 同性愛者が何年つきあっても制度的に何も守られていない。即ち、国から何も期待されていないということ。社会から期待されていない私達は何を活力源として生きて行けば良いのか？

＊DP法：ドメスティック・パートナー法。一定期間同居する同性愛のカップルに年金や財産相続の権利を認める法律。

考察

男性同士のパートナーシップが法的に守られていないことに関連して、将来の孤独への不安を感じている研究参加者がいました。異性愛者の結婚においては、法的な守りや縛り、周囲からの期待や社会規範、あるいは子どもの存在によって、相手との関係を維持しようとする動機づけが多少なりとも支えられています。しかし、同性のカップルは多くの場合、そのいずれの支えも欠いています。愛情対象となる同性を見つけても、男性同士のカップルへの理解があまり得られない社会の中で、互いの思いや信頼だけを頼りに関係を長く続けていくことは、決して楽ではないと思われます。上記の自由記述からは、そうした関係を結べる相手とめぐりあえたことを喜ぶ人でも、その関係が社会的・法的に保証や認知されていないために、「いつかは別れが来る」「ひとりになってしまう」という将来の孤独への不安、あるいは「自分たちは社会から何の期待もされていない人間なのだ」という感覚を抱え続けていることが窺えます。

また、自由記述からは「一緒にいたい相手でもどうせずっと一緒にはいられない」という諦めや割り切りによって、性的な関係は持っても、その関係を心理的に深めることは最初から避ける場合もあることが窺えました。それは、一般的には「性欲を満たすだけの」「無責任な」関係の持ち方と見なされるかもしれませんが、確かな関係を求めても得られない時の落胆や悲しさを感じなくてすむための、やむなき身の守り方とも考えられます。

男性同士のカップルの関係が法的にきちんと保証されていないことは、実際のカップルが被る現実的な不利益だけでなく、ゲイ・バイセクシュアル男性の将来への希望や、「将来につながる今」をよりよく生きようとする意欲を持ちにくくする、などの眼に見えない心理的な影響を及ぼしている可能性があると思われます。

◎HIVや性感染症の予防

○HIVの検査を受けたいけど、地域の保健所では時間的に不便なので検査が受けにくい。

○HIVの自己検査法がもっと利用しやすくなればいいのではないか。

○ゲイにとって、予防についての情報を得られやすい環境を作る必要があると思う。

○ゲイであることを明らかにしても大丈夫な、予防の方法について相談できたり性感染症の治療が受けられる医療機関が必要だと思う。

○セックスを規制したり純愛を推奨するのでなく、定期的にHIVや性感染症の検査を気軽に受けられ、カウンセリングにつなげられるような体制作りが必要だ。

○HIVについては、「ゲイの病気」とか、「ゲイの撲滅が予防」というようなことを言う人がいて、不愉快だ。

○異性愛者にも起こる病気なので、HIVについて色んな媒体を使って各々にまずは実情を知ってもらう努力をすべきだ。

○HIVの検査を受けたほうがいいのかもしれないが、やはり怖い。

○自分ももしかしたらHIVに感染しているのではないかと不安になることがある。

○もっと多くのゲイが、正確な知識を持って積極的に予防する努力をしてほしい。

○コンドーム使うのが当たり前という風潮になってほしい。

○本当はセーフセックスがしたくても、なかなか「コンドームを使おう」と言い出せないままセックスが始まってしまうことが多い。

○オーラルセックスではコンドームを使わないのが今は主流だが、オーラルセックスについてもコンドームを使うよう啓発してほしい。

○感染リスクはゼロでないとわかっていても、フェラチオでコンドームを使うのはちょっと興ざめしてしまうというのが本音だ。

○彼としかセックスをしないので、コンドームを使わずに、できるだけ性感染症のリスクを低くするにはどうすればいいのかについての情報がほしい。

○男性同士のセックスは、そういう場所に行けば相手を探すのが結構簡単なので、その性欲を抑えてセックスを控えるような感染予防は難しいと思う。

○早くHIVの特効薬が開発されたらいいと思うけれど、それが開発されたらみんなもっとセックス三昧になるんだろうなと思うと、怖い気がする。

○自分はHIV陽性者だが、周りの友達にHIVのことをカムアウトした上で予防を呼びかけても、あまり聞く耳を持ってくれない。

○知らずにHIV感染者とのセックスをしたが運良く感染しなかった。それからは本当に気をつけようとしている。

○AIDSを減らしたいのなら発展場やハッテンという行為に対して社会的制裁を加えるべきだ。

○自分はセックスの時必ずコンドームをつけるようにしているが、今まで相手の方から「つけよう」と言われたことはなく、コンドームを持っていた男性に出会ったこともない。

○多くのゲイの実際の行動はHIV予防を優先させたものにはなっていない。

○自分は皆にHIVの感染の恐ろしさを話して退かれる。

○ネット上では、予防に対して意識の低い人が結構目立ちます。

○HIVについて私達若い世代にはあまり危機感がないように思う。友人のセックスについて病気は大丈夫かと心配したら「脅そうとしてるのか」と軽くあしらわれたことがあり、意識のギャップにショックを受けた。

○AIDS啓発に関わっている友人も、ポジティブの友人もいるが、頭では分かっていても自分には関係ない、という感じが拭えない。

考察

本調査のテーマのひとつであるHIV予防に関連して、様々な具体的な提案や要望、感想などが寄せられました。まず、「HIV＝ゲイの病気」と誤解されることへの反発がありました。しかしもちろん自分たちにも関連する病気として認識し、性的指向を明らかにしても安全な、また性的指向に則した具体的な情報を得られる、検査・相談・治療環境の整備を求める声が多数寄せられました。その一方で、①セーファーセックスを実践しようとしても、相手の非協力や周囲の認識の乏しさ、意識の相違などから実践しにくいこと、②現実に身近にHIV感染した人がいてもなお、自分にも関わりのあることだと実感できない場合もあること、③予防を二の次にした性行動をとる周囲の人々に対して懸念、不安、怒りを感じている人もいることなどから、ゲイ・バイセクシュアル男性の中でもHIV予防への意識やスタンスの差がかなりあるものと思われます。危機意識や予防への動機づけを持つ人が、それをセックスの相手や友人に伝えようとしてもなかなか容易ではなく、逆に孤立してしまう可能性すらあるようです。

ゲイ・バイセクシュアル男性への予防介入においては、当事者だからこそ果たせる役割が多々あり、当事者団体やグループがそれを活かした活動をしています。しかし保健・医療・福祉などの分野における当事者性のない専門職が関わることには、当事者同士のピアプレッシャーやコミュニティ内の性規範に影響を受けずに、中立的な立場からの介入や支援ができるという利点があります。「直接的介入はコミュニティに一任すれば良い」としてしまうのでなく、非当事者だからこそ可能な直接介入の方法をも検討・開発していく必要があるのではないでしょうか。

◎心理・社会的要因と性行動

○ 恋人がいても、世間での「異性愛的な会話」に押しつぶされそうになる時、時々誰とでもかまわないからセックスしたくなる時はある。

○ ゲイの社会ではさまざまなストレス要因があることで、つきあっていても性欲に走ったり、性病の知識があるなしにかかわらず感染する恐れのあるセックスをする人が多かったりするから、必然的に性病の感染者が多くなるのだと思う。

○ ゲイの場合は、ほかに行き場がないからハッテン場で性欲を解消することになるので、病気が流行りやすいのだと思う。

○ ゲイであることのストレスを解消するために、多くの人とのセックスに走ったり、予防の知識があっても感染する可能性のあるセックスを求める人がいるのではないかと思う。

○ 男女間よりも同性間でHIV感染が広がっているのは、男女のように結婚が認められていないために、付き合うことに社会的な責任が伴いにくいからではないか。

○ 日常何らかのストレスを抱えながら、「ここが自分たちの生きる場だ」と勘違いし、ゲイの世界でしか生きがいが感じられなかったりセックスが過剰になり歯止めがきかないほどになって病気も怖がらなくなってしまい予防も何もなくなってしまうのだと思う。

○ 現代社会ではゲイの存在の認知が低すぎ、悩んでいる人が駆け込める場が見つけられない。誰にも言えない悩みを発散するように発展場に流れるのです。

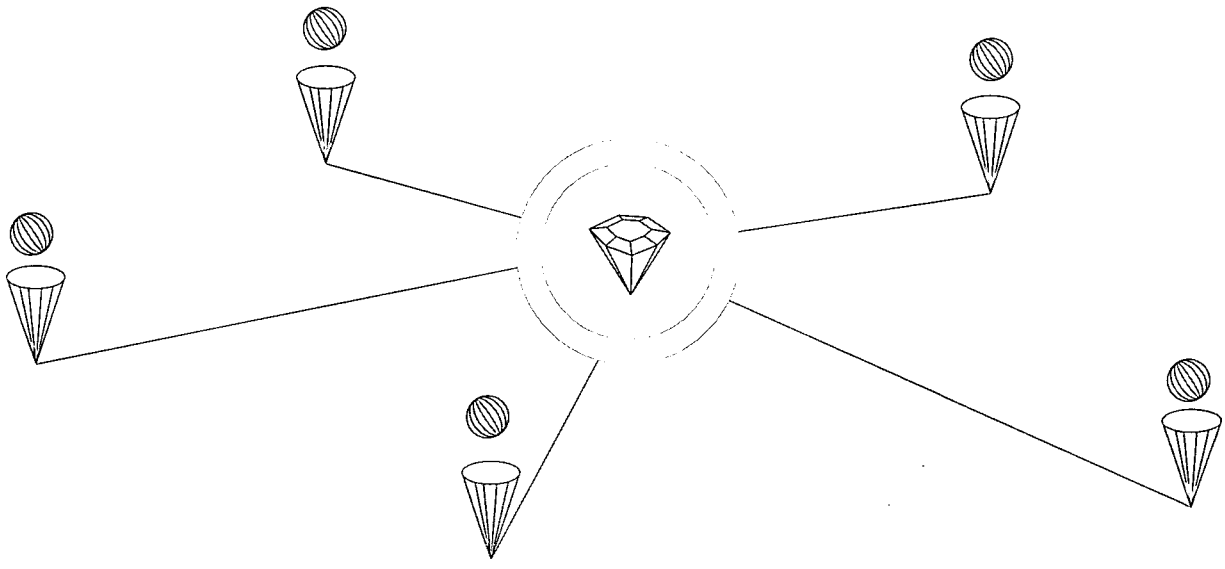
○ もっと自分の性的傾向を気軽に話せる社会になってほしい。そうすれば、性感染症予防についても、もっと気軽に話し合えるのではないか。

○ オーラルセックスにもコンドームを使えということは、そのような行為をするなと言っているに等しく、アイデンティティを否定されているように感じて実行できない。生活のあらゆる場面で自分を殺して生きている、抑圧されていると感じることが多く、唯一そのようなところでしか自分を解放させることができず、感染の危険に目を伏せてもそう行動してしまう。同性愛者がもっとのびのび暮らせる社会になれば、感染症への気遣いもできる余裕が生まれると思う。

考察

これらの記述は、ゲイ・バイセクシュアル男性が置かれた社会的状況や、その中にあっての心理的状況が性行動へ駆り立てる要因になっていることを、「自分」や「自分たちゲイやバイセクシュアル」の体験や内面の洞察を通して述べたものです。他の項目の記述内容からも窺い知ることができますが、異性愛社会の中でゲイ・バイセクシュアル男性として生きることの絶え間ないストレス、居場所のなさ、「押しつぶされ」「自分を殺す」感覚と、その反動のようにゲイの世界での「発散、解消、解放」のためのセックスに「走り、流れ、歯止めがきかなくなる」現象があることを、彼らは伝えようとしています。おそらくそのような時は、自分や相手の健康を守ろうとする気遣いは失われ、「どうなってもいい」というような気持ちで、耐えていた感情を解き放つための、あるいは寂しさや空虚感を埋めるためのセックスになっているのではないでしょうか。HIV感染の可能性を知り、コンドームの予防効果を知り、コンドームがすぐ側にあったとしても、「使う」という行動を取るところまで自分をコントロールできない瞬間があることが、これらの記述から推察できます。

環境から受ける否定的なプレッシャーが大きければ大きいほど、またそれに対処する自我の力が育っていなかったり、とても弱っている状態であればあるほど、たとえそれが健康を害する可能性を伴うものであっても何かの行動によって内面のモヤモヤを晴らそうとする機制が人間にはあります。上記の研究参加者らのように自分の内面の状態と、表に現れる行動のつながりに関して気がついて、かつ言語化できる人ばかりではないでしょう。自分が受けているストレスの強さや、自分が抑えこんでいる感情に気づかずに、やみくもにセックスに駆り立てられている人たちもいるのではないでしょうか。



◎依存傾向

○ 病気は怖いです。でもセックスもしたい。発展場でのセックスは後悔するだけ。でもしたい。

○ セックスは楽しい。しかし、したいからする、のでなく、性的欲求もあるが、それよりも自分が止められないところに問題がある。多くの人がそうではないかと思う。

○ すぐにエッチしたいって思ってしまう。どうしたら抑えられますか？病気とか怖いからやめたいのだけど、やめられません。

考察

性衝動のコントロールの効かなさと、それに対する自分自身の困惑や危機感を述べる人がいました。強い性衝動とそれをコントロールしたい気持ちとのせめぎ合いに翻弄され、結果的に性衝動を行動化してしまったことへの後悔や無力感、感染不安などに苛まれる辛さが伝わってきます。性行動の活発な人の中でも、「セックスにおける個人のライフスタイルや特性だ」と言える場合もあると思われますが、上記のような「自分が止められない」場合は、セックスに対する依存傾向を生じている可能性があります。アルコールなどへの依存と同様、自分の意志の力だけでコントロールを取り戻すことがとても難しく、程度によっては何らかの専門的治療や援助を要するものです。

性行動の問題については、誤解や批判を受けることへの恐れから、他者に対してSOSを特に発しにくいのではないかと思われます。しかし、本調査がゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスとHIV感染予防をテーマにしたものであったことから、上記の研究参加者は自分自身の戸惑いを率直に述べることができたのかも知れません。誰にも言えないけれど実は同じような依存傾向に苦しんでいる、あるいは「もうどうにもならない」と思っている人もいるでしょう。性衝動を統御できない苦しさは、咎められるべきことでなくSOSを発すべきことなのだ、というメッセージを彼らに対して発信することや、必要であれば精神科治療や心理カウンセリングその他の援助が得られるような機会やルートを作っていくことが必要ではないでしょうか。

◎カウンセリングや医療機関

○自分がゲイだということを、ゲイじゃない専門家に話してみたいと思っている。

○カウンセリングを受けたいと思うことがあるが、秘密を厳守してもらえるのかが信じきれず踏み出せない。

○カウンセリングを受けているが、相手がセクシュアリティを理解できるカウンセラーかどうかが、非常に重要だと思う。

○カウンセリングを過去に受けたことがあるが、「結婚すれば落ち着きますよ」など同性愛に対する理解がない発言をされて、傷ついた。

○ゲイであることを話さずに精神科にかかってカウンセリングも受けているが、話して拒絶されないかととても心配だし、話さないでいるのも隠し事をしているようで辛い。

○心の警戒を解かない限り本当の問題について語れないのに、「自分が同性を好きだと言えば、気持ち悪いと思われるのではないか」と心配になり、カウンセラーに対し正直になることができない。またカウンセラーが不注意に嫌悪感を見せれば、こちらは死ぬほど苦しいところにさらに鞭打たれることになる。カウンセリングには興味があるが、ゲイの気持ちはゲイにしかわからないとも思う。

○セクシュアリティについても話し合えるカウンセラーと出会えて、精神的にとても落ち着いた。

○自分はHIV陽性者だが、病院でカウンセラーと話せることが支えになっている。悩みを言葉に出してみることが大事なんだなと思う。

○ゲイを十分に理解してくれる心理カウンセラーに会いたい。軽蔑されることに怯えている。

○色々悩みがあっても、まず「ゲイである」という部分で躊躇してしまうので、ゲイに理解のある信頼できるカウンセラー/医療機関があれば行きたい。

○医療機関でプライバシーが守られるかどうかわからないので、セクシュアリティをオープンにして受診できない。ゲイも安心して受診できる病院が必要だと思う。

○性的指向を隠しながらの医療受診は、精神的なストレス・苦痛が多いと思う。

○自分の性に対しての問題がごまかしきれなくなってきており、機会があればカウンセリングを受けてみたいが、自分には壁が高すぎる。自分のことを全て話せる場所が人間には必要だ。

○カウンセラーに性のことを相談したいとは思わない。性に対する意見は人それぞれで、解決できるわけがない。

○悩みの原因や背景に「ゲイであること」が含まれている時にそれを全部説明しにくく、かといってそれをきちんと話さないと、その結果としての現在の状況をわかってもらえないのではないかと不安になる。

○心理カウンセラーはクライエントにあえて示唆を与えないようにしているのか？洗いざらい話すことですっきりすることはあるが、それなら友人に話すのでもあまり変わらないと思ってしまう。

○ゲイの人が相談できるカウンセリングの場を全国に作ってほしい。

○同性愛者のメンタルケアを安心して託せる医師のいる機関がわかるサイトがあるといい。

考察

性や性的指向の問題に限らず、何らかの悩みでカウンセリングや精神科受診への関心があったり、必要性を感じている研究参加者にとって、実際のメンタルヘルスの専門家へのアクセスには高い壁があるようです。ひとつの壁は、医師やカウンセラーが、ゲイ・バイセクシュアルという性的指向をどう考えているか、自分が明かした時にどう反応されるかがわからないという不安です。そのために、①悩みの原因や背景に性的指向のことがあっても、それをそのまま言い辛い、言えなければ悩みをちゃんとわかってもらえないように感じる、②問題が性的指向とは直接関係ないことでも、性的指向を伝えないままで相談することは、自分自身を隠している、すなわち本来なら安心して内面を開示したい相手に対してもありのままの自分でいられない状態での相談になってしまう、③援助や治療を求めた相手に偏見や無理解によって更に傷つけられることが恐い、といったことが躊躇の原因になっていることがわかりました。

もうひとつの壁は、秘密やプライバシーがきちんと守られるかどうかの不安です。ゲイ・バイセクシュアルの人に限らず、カウンセリングや精神科治療を受けるすべての人にとって、守秘義務への信頼がおけるかどうかは大切なポイントですが、そこがどうしても信じきれないために近づけないという研究参加者もいました。それほど、性的指向を含めた自分を開示することは（例え相手が専門家であっても）、彼らに強い不安を引き起こすのでしょう。

その他には、「ゲイのことはゲイでなければわからない」「性は人それぞれだからカウンセラーに話しても仕方がない」との意見や、心理カウンセリングの意義への疑問もありました。これらを総合すると、彼らは、カウンセラーや精神科医に内面の問題を打ち明けたり相談したりする際に、ゲイ・バイセクシュアルであることも含めたありのままの自分として向き合いたいが、「それができるような安全な場・安心できる相手・信頼に足る専門性なのか」「自分の悩みや苦しみを本当にちゃんとわかってもらえるのか」という不安や懸念がとても強いと言えるでしょう。その不安が解決または軽減されるならば、専門家（同じゲイ・バイセクシュアルでなくても）の援助を求めたいと思っている人は少なくないと思われます。

◎まとめ

一般にマイノリティグループに属する人は社会的なプレッシャーの中で生きています。ゲイ・バイセクシュアル男性も、異性愛者が中心の社会の中で生きていく上では様々な心理的葛藤を抱えていることは、調査実施にあたっての仮説のひとつでした。

今回の調査は、インターネットによる匿名質問票による調査という手法を採りましたが、その匿名性や利便性も手伝ってか、自由記述欄には多数かつ多様な声が寄せられました。その中には、ゲイ・バイセクシュアル男性としての自己を肯定できない苦悩や、この自己否定感の強さのあまり生きていくことにすら困難を感じていることを、一気に吐き出すような内容のものも多く見受けられました。

その一方、自らの性的指向を肯定し、社会的プレッシャーに屈することなく生きていこうとするゲイ・バイセクシュアル男性からの意見も多く寄せられました。本調査への協力によって自分の属するコミュニティに貢献できることを喜んだり、回答のプロセス自体に自分を見つめ直すという意義を積極的に見出したりといった様子が、私たちに伝わってきました。また逆に、ゲイ・バイセクシュアル男性のグループが心理的問題を抱えていたり、特殊な性行動に走っているという決めつけのもとに調査を実施したのではないかという疑問も多数寄せられました。

このように、自らの性的指向との折り合いのつけ方の程度と、それによる本調査への反応には、大きな個人差が見られます。しかしながら、多くの回答者に共通していたのは、異性愛者中心の社会でゲイ・バイセクシュアル男性として生きることから感じるストレス、すなわち性の多様性に開かれていない異性愛者への憤りや落胆の表明でした。そして中には、このようなストレスのために彼らの性衝動が高まったり、HIV感染予防行動の阻害につながったりしているのではないかといった意見も寄せられていました。

こうした自由記述の全体像を振り返ってみると、各個人の状況と抱える問題によって、反応も個別に大きく異なるということがわかります。このことは、ゲイ・バイセクシュアル男性を一括りのグループとしてその心情や行動を論じることの困難さ、ひいてはHIVの感染予防行動に関する介入についても、単一の方法論ではいかないということを示唆しているのだと考えます。また、メンタルヘルスやセックス、HIV感染の話題は普段はタブー視されがちな上に、個人のごくプライベートな部分に触れることであるだけに、介入の対象者に様々な感情的反応を喚起しうるデリケートなテーマです。介入することが傷つきや不快を残す体験にならないよう、その時々の反応への感受性と配慮が必要だといえるでしょう。

しかしながら、今回の自由記述に寄せられた研究参加者の声には、今後の介入や彼らへの援助に関して、たくさんのヒントがありました。彼らは、異性愛者が変化することを願うだけでなく、周囲のゲイ・バイセクシュアル男性や自分自身もが変化し、精神的にも性的にもより十全に生きていけるようになることを望んでいます。そしてそのための支援者として、私たちを含む研究者や、保健・医療・福祉・教育の分野に携わる対人援助職に寄せられている期待は、非常に大きいのです。

本研究がゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスの向上およびHIV感染予防行動対策の一助となることを、研究実施者一同願ってやみません。

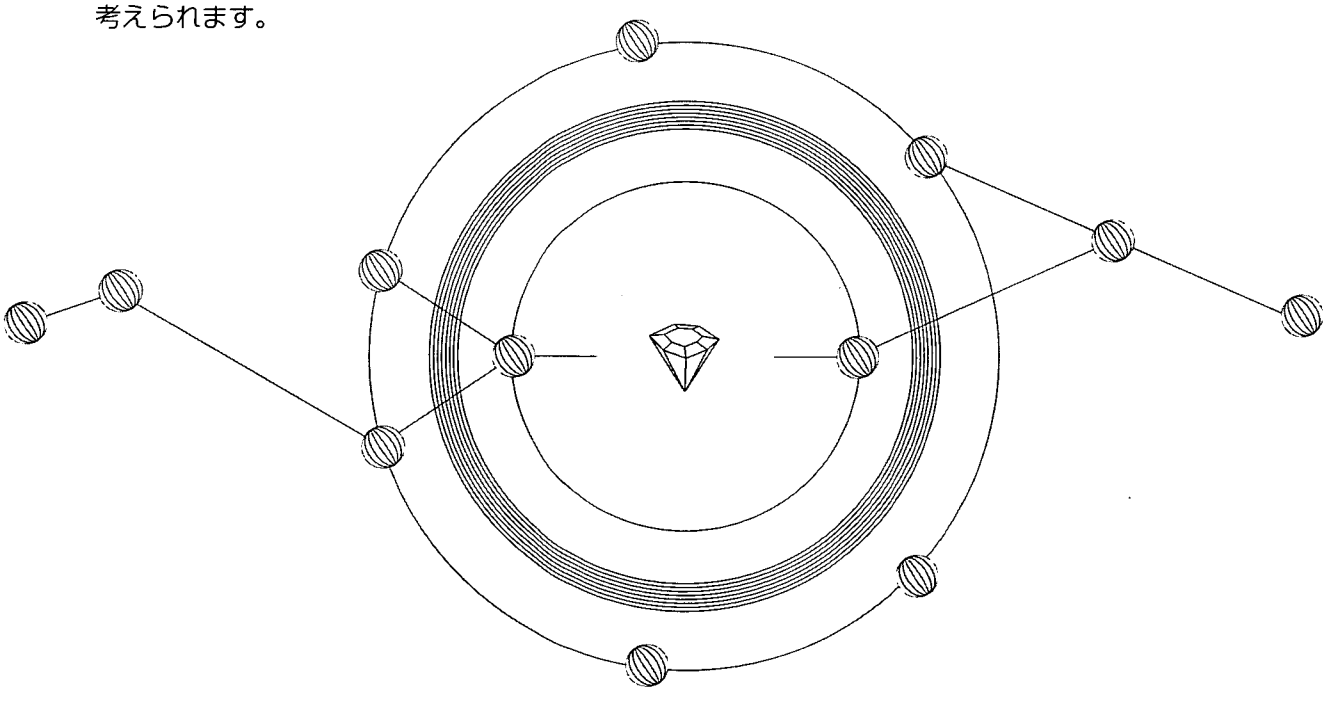
◎提言

本調査の結果をもとに、ゲイ・バイセクシュアル男性が対人援助職の方々に求めていると思われる事項の中で、特に共通すると考えられる点を下記のようにまとめました。

対人援助職（保健・医療・福祉・教育領域）の方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性は、ステレオタイプな見方で一括りに対応されるのでなく、ひとりひとりをニュートラルにありのままに理解されることを望んでいます。彼らは、対人援助のさまざまな仕事に就いている方々に対して、性の多様性を理解した上で、個々に異なる人間を援助しようとする姿勢を求めています。性的指向を明らかにしても拒絶せず、また性の多様性への理解を促進する医療・保健・福祉・教育領域の専門職が、必要とされていると言えるでしょう。

メンタルヘルスの専門家（精神科医・臨床心理士・カウンセラーなど）の方々へ

メンタルヘルスに関して援助や治療を必要としているゲイ・バイセクシュアル男性の中には、性的指向を明らかにした際にどう反応されるか、秘密保持を信頼できるか、などの不安から専門家にアクセスできずにいる人が少なくありません。精神科医・臨床心理士・カウンセラーには、アクセスすること自体を、またアクセスしたあとも性的指向について自己開示することをためらう彼ら特有の恐れを理解し、クライエントがゲイ・バイセクシュアル男性とはわからなくても性的指向について中立的な姿勢を保つなど、信頼関係を構築できるような支援環境を提供することが求められています。

また、ゲイ・バイセクシュアル男性との臨床実践を通して得られた知見を、同じメンタルヘルスの専門家に対して提供することや、大学や専門学校において保健・医療・福祉・教育領域の専門職養成に携わる際に、性の多様性に関する教育を行うなどの努力は彼らへの支援の輪を広げる上で重要であると考えられます。